

日本英学史学会広島支部

ニュースレター

No. 31

日本英学史学会
広島支部
平成 13 (2001) 年
6 月 10 日

ご 換 拶

新支部長 松 村 幹 男

任期満了にともなって、今年度より支部役員が交代することとなり、広島支部長の重責をお受けすることとなりました。これまでと同様、会員皆さまの暖かいご支援とご協力をお願い申し上げます。

顧みますと、日本英学史学会広島支部が設立されたのは昭和 52 年 (1977) 11 月 10 日のことでした。当時まだ広島市東千田キャンパスにあった教育学部の私の研究室に数名の方々にお集まり頂いて学会設立準備の協議を何度も重ねたことを思い出します。中でも前支部長寺田芳徳先生の熱い強い学会設立への思いが今も脳裏を離れません。あれから 24 年、学会として活動を続けてきました。最初の会員数は 24 名でした。

爾来、定宗一宏先生をはじめ、妹尾啓司先生、寺田芳徳先生と歴代の支部長の方々の築いてくださった基礎がこれからのわが支部の活動の源泉であると感じないわけにはゆきません。事務局を最初に担当し、会報は手書きのものを発行していました。広島大学の西条移転や全国英語教育学会・中国地区英語教育学会事務局の仕事などのため、5 年間、支部例会は開催したものの会報も発刊できなくなり事務局の仕事が停滞してしまいました。この段階での責任はひとえに小生にあります。慚愧の極みであります。

平成元年 (1889) に入り事務局を比治山大学の寺田先生が引き継いでくださることとなり広島支部は再生することができました。この段階から旧事務局の体制を改め、事務局長に加えて、会計担当・編集担当の専任理事を設置することとなりました。寺田事務局長のあとは学校教育学部の小篠敏明先生が担当してくださいました。会計は多田保行先生、後に松岡博信先生が、そして会報 (後に論叢) の編集はこの時点から竹中先生にお世話になって今日に至っています。会計監査は当初から山本勇三先生にお世話になってきています。

これから次の 10 年 20 年を見通して、学会はいかにあるべきかを真摯に考えてゆかねばな

らぬと思います。本学会は何を調査研究すべきか（例えば、戦後史をどうするのか）、個人研究に加えて今後、共同でやるプロジェクト研究をどのように進めるのがよいのか、英語教育学をはじめ関連の諸学問との連携や位置づけをどうするのか。さらに後継者の育成に学会は何ができるのか。考察検討すべきことは山積しています。研究領域の基礎基盤を拡げ確かなものにする（量的拡大）と研究の質を高めること（質的向上）を如何にはかってゆくか、真剣に取り組んでゆきたいと考えます。よろしくお願い致します。

支部総会、例会開かる

平成13（2001）年度支部総会が去る5月26日（土）午後2:00より、松岡博信先生のご配慮とご尽力により、安田女子大学で研究例会に先立ち開かれ、支部活動報告（小篠敏明、竹中龍範理事）、会計報告（松岡博信理事）、会計監査（山本勇三、馬本勉監査）、役員改選、年間計画（小篠敏明理事）が提案され、原案通り承認された。



新役員は次の通り。

支部長	松村幹男	
副支部長	小篠敏明	田中正道

顧問（相談役）	定宗一宏	妹尾啓司	寺田芳徳	
顧問	五十嵐二郎	植木松太郎	神鳥武彦	橋本保人
理事	上杉進	馬本勉（紀要担当）		河口昭
	竹中龍範（紀要担当）		多田保行	田村一郎
	能登原昭夫	野村勝美	松岡博信（会計担当）	
事務局長	深澤清治			
会計監査	風呂 鞏	山本勇三		

引き続き行われた本年度第1回（通算第44回）研究例会では、20人の会員が参集し、実り豊かな研鑽の集いとなった。

研究発表「新教授法の紹介の中におけるフィエター：フィエターはどこに？」（寺田芳徳先生司会）では、竹中龍範先生が明治・大正期におけるフィエターの教授法についてご研究の成果を発表された。講話「小泉八雲とその今日的意義：癒し(healing)、周縁性(marginal)、想像力(imagination)」(田村一郎先生司会)では、風呂鞏先生が小泉八雲の今日的意義について研究の成果を報告された。講話「昭和20年代の英語学習：恩師と師範予科」(上杉進先生司会)では、岡田秀昭先生が昭和20年代の広島師範学校予科の英語教育についてご自分の経験を交えながら話された。

研究発表会の後行われた懇親会では、多くの会員が集まり、松村新支部長を中心に歓を尽くした。

竹中龍範先生のご発表を拝聴して

襟をただして、志を新たに

野村勝美

言語教授法上、旧来の Grammar method に対抗して新教授法を組織したのはドイツのマールブルヒ大学教授フィエター(Victor)であった。彼は1882年に *Der Sprachunterricht muss umkehren!* という僅か38ページの小冊子を著し、外国語は文字を通してでなく口から耳に、翻訳を行わずに、直接に教えることの急務を説いた。竹中先生は、日本において明治・大正期に諸家が説いた新教授法のなかに、フィエターがどこまで直接的に紹介されていたかを緻密に検証された。英語教育の分野で説かれた新教授法のなかに、フィエターの名前は散見できるものの、内容面で彼から直接の引用はみつからない。それではフィエターはどこへ行ってしまったのか、さらに論を展開されて、国語教育のなかに彼が見つかることを指摘された。国語学者保科孝一(1872～1955)をとおして、フィエターが詳述されていることを紹介された。

日本の明治期に英語教育の分野でフィエターが詳述されなかった理由について、ひとつの可能性として、大塚高信から引用し、「---ドイツ語が読めなくては、当時の学問としての英文法研究の業績には接し得なかった。そして明治時代のわが国の英文法学者は、おおむねドイツ語に堪能ではなかったらしい。」と竹中先生は語られた。

竹中先生のご発表をとおして、「フィエターはどこに？」と私自身が問いかけられたような心境になり、襟をただして、かつて誓ったあの熱い思いを、改めて思い起こした。志を新たにすする契機となるご発表を拝聴できた。

風呂先生のご発表を拝聴して

今日に生きる八雲

鉄森令子

昨年 2000 年は小泉八雲生誕 150 周年の記念すべき年でハーン縁りの各地で顕彰の行事が相継いだ。今一度、八雲の意義とは何であるのか、比治山大学の風呂先生が、癒し (healing)、周縁性 (marginal)、想像力 (imagination) の 3 つの観点から八雲の今日的意義をご発表された。

八雲は西洋文明の行き詰まり、「疲れ」を痛感して 1890 年 4 月に明治時代の日本に救いを求めてやって来た。「ハーンは新日本に生きながら旧日本に目を凝らし、耳を澄まし、その心を探り続けた」(仙北谷晃一氏「ハーン文学の今日性―没後 90 年に―」) が、その中に今の人々がケルトブームの中で求めている癒しに通底するものがある。

カリブ海、アイルランド、日本はハーンが最も影響を受けた重要な三つの地域である。近年のハーン再評価の動向、クレオール現象への世界的関心、ケルトブームと無関係ではない。元ギリシャ駐日大使コンスタンチノス・ヴァシス氏は、ハーンの特徴として、①ギリシャ人の基本的性格にもとづく移動・放浪癖。②ギリシャ人の民族性から惹起した西欧社会の価値観とカソリックに対する反感。③ギリシャ神話への愛着に由来する怪談、奇談、超自然といったハーンの魅力の 3 つを挙げているが、これもハーンが西洋機械文明の手が届いていない周縁の地を愛したことを証明している。

ハーンは『クオレ』の学校を松江、熊本に見出し、師弟間の情的な結びつきが想像力に必要として松江から東京まで「心の教育」を行った。その顕著な例として、東大の学生がハーンの英詩の朗読を聞いて涙を流していたというアーネスト・フォクスウェルの回想がある。

癒し、周縁性、想像力に価値をおくハーンは「今から百年前に生きた、まさに私たち自身だった」といえる。また、ハーンと広島との接点についても今後、明らかにしていきたいと

述べられ、ご発表を終えられた。明治以降、日本は大江健三郎氏の言う ambiguous なやり方で西欧諸国に追いつくため発展を成し遂げてきた。しかしながら過去、西洋がそうであったように今、日本も文明の行き詰まりを感じつつある。こういう時にこそ、100年前の日本の良さを書き残してくれたハーンを読むべきではなからうか

岡田先生のご発表を拝聴して

遠くて身近な昭和 20 年代

本岡 直子

岡田秀昭先生による特別講演は、「昭和 20 年代の英語学習—恩師と師範予科—」と題し、戦後の歴史に目を向けた貴重なご講演であった。歴史の研究において、空白となりがちな戦後の部分も、戦後 50 年以上を経た現在、歴史の流れの中にきちんと位置づける必要があり、岡田先生による講演はそのための大きな足がかりとなると思われた。また、師範予科という、全国的にも数少ない学校に学ばれた岡田先生のご経験をうかがえたことは、非常に意義深かった。

岡田先生はその講演において、平賀先生や土井先生などのユニークな授業の仕方をご紹介下さり、それらの先生方の熱心さとともに、学ぶ側もまた、不自由な中で必死に英語を学習していった状況が伝わってきた。

また、昭和 20 年代という、比較的現代に近い時代でさえ資料の収集がいかに困難であるか、岡田先生のお話をうかがって痛感した。歴史を着実に記すことの重要性を感じることができた。

しかしながら、同時に驚いたのは、フロアからの反応の多さであった。昭和 20 年代という時代は、一部の先生方にとってはご自分の体験そのものであり、一部の人にとっては、自分の全く知らない年代ではあるが、かといって全く無縁の時代でもない、そんな不思議な時代である。岡田先生の資料の中に「不動心」の石碑の話が出てきたが、いったいこれまで何人の人たちがあの石碑の前で思い出を作ってきたのだろう、とつい思いを馳せてしまう、昭和 20 年代というのはまだそんな身近な時代なのだと感じた。様々な方の記憶による記録が可能な内に、これ以上年月の立たない内に昭和 20 年代の英語学習について引き続き整理していただけたら、と思う。

昭和 20 年代の英語学習に対するさらに詳しいご発表と、今回惜しくも聴かせていただけなかった「リングの歌」を、次回は是非お聴かせ願いたいものである。

『英学史論叢』発行と原稿募集について

竹中理事のご尽力により、『英学史論叢』第4号が発行されました。第5号に向けて会員の皆様の積極的な投稿をお願いいたします。研究論考、英学史随想、英学史時評、書評等、何でも自由です。多数の応募をお願いいたします。送り先は竹中理事まで。3月末日締め切りです。詳しくは『英学史論叢』の執筆要項をご参照ください。

会費納入のお願い

支部の活動は皆様の会費により支えられています。出費多端の折り、誠に恐縮ですが、本年度会費3,000円をご納入頂きますようお願いいたします。

日本英学史学会広島支部事務局	深澤 清治
〒739-8524 東広島市鏡山1-1-1	
広島大学教育学部英語文化教育学講座内	
Tel & Fax: (0824)24-7058	(深沢清治)
	(留学中)
	(0824)24-7059 (小篠敏明)
郵便振替口座	01360-9-43877
加入者名称	日本英学史学会広島支部

会費3,000円をご納入いただきますようお願いいたします。